ギーツエクストラ　仮面ライダーアルデン

きゃぷてん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新星、参戦。

不登校の青年、菜月昴。彼は謎の女性から黄色い箱を渡され、こう告げられる。「今日から貴方は、仮面ライダーです！」

もう一つの世界の菜月昴の仮面ライダーアルデンとしての戦いが幕を開ける。

目次

交錯Ⅰ：新星誕生 ―― 1
交錯Ⅱ：監獄脱出 ―― 13
交錯Ⅲ：祈願願望 ―― 31

交錯Ⅰ：新星誕生

その日、青年は思い知った。
世界の終わりというものは、突然訪れることを。
「ジャ！」
「がああっ！」
命は理不尽に、あっけなく散ってしまうことを。
それは自分でさえ、例外ではないということを。
「ジャ～……」
ただ、何か食べたいからコンビニに寄ってお菓子を買い、家へ帰宅しようとしただけだ。
それでも突然始まった。世界の終わりは、命の蹂躙は。
尻餅をついていた青年に、白い刃の切先が迫る。きっとアレが、自分の体を切り裂くのだろう。そしてそれによって血が大量に噴き出し、失血死でもするんだろうと、適当に予想をする。

ああ、思えば最低の人生だった。ただあの言葉を糧に生きようとした結果、馬鹿なことをやって孤独になって、クソみたいな時間を貪って。きっと神様は俺を見放したんだろうって、そう思った。だったら死ぬのも仕方ないな。

「……や……だ……」

死を覚悟してた、受け入れようとしてた。でも、自分の意地汚い本能はそれを拒絶しようとしてるらしい。

「死にたく……ない……！」

「ピアーブ！」

刃が青年の体に振り下ろされようとする。神様は見放した、自身の意地汚い願いなど聞き入れるはずもない――――そう思い、見届けようとした。

「ハアッ！」

「ジャアッ！」

そんな青年の前に救世主は現れた。その救世主は、白い狐の銃士だった。

「あんたは……」

「こんな悲劇は忘れるに限る」

「え……？」

「始まるぞ……新しい世界が」

狐の銃士のその一言と共に、荘厳な鐘の音が鳴り響く。それと同時に青年は――――菜月昴は、意識を失った。

◇◇◇◇

「！」

青年は瞼を開き、目を覚ます。目の前にあるのは見知った天井、自分の部屋だ。

「変な夢……」

頭を掻きながらベッドから身を起こす青年、菜月昴。どうも自分は直前まで、怪物によって世界が終わる夢を見ていたらしい。ゲームやラノベの影響かもしれない。

「……」

その夢の中で出てきた白い狐の銃士。スバルの中で、その人物がどうも引っかかる。ただの夢の筈なのにだ。

「グッモーーーーーニン息子ォーーーーー！」

ベッドから立ち上がり伸びをしていると、部屋の扉が開かれ何者かが入り、大声と共にベッドへ飛び込む。ボスンッ、と音がしてその上半身半裸の男はベッドへ沈み込んだ。

「何だよ昴ゥー！　せっかく俺が愛情たっぷりのダイビングプレスを決めようとしたのにもう起きてたのかよー！」

「今日は早起きなんだよ……ていうかソレやめろよ！　腹がクソ痛いから！」
半裸の男――――昴の父である菜月賢一は不満げな様子であり、昴はそれに気怠げながらもツッコミを入れた。
「俺は先に降りるから。もう母さんがご飯作ってるだろうし」
「おいおい待ってくれよ愛しい息子よォー！」
早足でそそくさと部屋から出るスバル。それを追いかける賢一だった。
◇◇◇◇
「昴、貴方にお客さんが来てるわよ？」
ちょうど階段を降りた先に、そこには目付きの悪い女性がいた。母親の菜穂子のようだ。
昴は階段を降り切って菜穂子が開いていた扉の先を見る。そこには、白黒の衣装を纏っている端正な顔立ちのポニーテールの女性が居た。
「おー何だよスバル！　知らないうちにこんな美人と友達になってたのか!?」
「いや完全に初対面なんだけど……」
賢一の発言を流しながら、スバルは女性の手元を見る。そこには黄色い箱があった。もしかすると宅配だろうか。だが何か頼んだ覚えはないし、自分に何かを送ってくれる仲の人物は居ない筈。そう思っていると女性は口を開く。

「申し訳ありませんが、菜月昴様と二人きりでお話をさせてもらえないでしょうか？」
「あ、はい。それじゃあ、ごゆっくり」
「昴、失礼のないようにしろよ？」
菜穂子と賢一はそう言って部屋の奥へ歩いていく。昴と女性は二人きりになった。
どうもこの女性は話したいことがあるらしいが、昴は彼女と面識はない。まさか宗教勧誘？　嫌な予感が昴の脳内によぎる。
「あのー……失礼っすけど宗教の方ですか？　すんませんけどそういうのは……」
「おめでとうございます！」
「へ？」
やんわりと断りを入れようとした時、突如として女性は祝福の言葉を告げた。
「厳正なる審査の結果、貴方は選ばれました！　今日から貴方は――――仮面ライダーです！」
◇◇◇◇
昴は賢一と菜穂子と共にご飯を食べて賢一が仕事に行った後、部屋に戻って女性から渡された黄色い箱を持っていた。
その箱は蓋がスライドして開いた状態であり、そこには小さい黒い何かと、大きめの黒い何かが存在していた。

「何なんだこれ……？　仮面ライダーって何だよ……？」
疑問を口にするスバル。あの後、黄色い箱を受け取って仮面ライダーが何か聞こうとしたが、女性はすぐさま何処かへ消えたのだ。
とりあえず中に入っている小さい紙を開いて読んでみる。そこにはデザイアグランプリなるものについて、こんな一文があった。
『最後まで勝ち残った者は理想の世界を叶えられる』
胡散臭い。昴の脳内に最初に浮かんだのはそれだ。それと、他にも入っている小さいのはＩＤコア、大きいのはデザイアドライバーというらしい。
恐る恐るまずはＩＤコアに触れようとする昴。
「いっ……！」
触れた瞬間、指に衝撃が走る。そして同時に、自身の脳にも衝撃が走った。
「え……？」
脳内に映像が映し出される。表現するならそんな所だった。
脳内には、謎の怪物によって人々と自身が襲われていた。世界の終わりを悟る中、白い狐の銃士が自分を助け、最後に荘厳な鐘が鳴った光景があった。
「夢じゃ、無かったのか……!?」
失われていた記憶が突然蘇ったことに困惑しながらもＩＤコアを手に取る。そして

デザイアドライバーを見ると、そこにはコアがちょうど嵌りそうな窪みがあった。
『ＥＮＴＲＹ！』
窪みに嵌めると音声が鳴る。デザイアドライバーを手に取るが、その後どうすれば良いのだろう。
「……こう？」
頭に乗っけてみた。何も起こらない。
「……こう？」
背中に当ててみる。何も起こらず。
「……こう？」
足に当ててみる。異変なし。
「……４度目の正直！」
腰に当てる。すると、帯が噴出し腰を一周して巻きつく。
『ＤＥＳＩＲＥ　ＤＲＩＶＥＲ！』
音声が鳴ったと同時に、青色の光が昴を覆う。光が晴れると、何処か見知らぬところにいた。周囲には他にもみたところ２０人くらいは居る。彼らも戸惑っている上に、腰に昴と同じデザイアドライバーを付けていた。
「何だここ!?」

　驚愕する昴。見たところ、どうも自分たちは空の上にいるらしい。つまり今いる場所は浮いているということだ。
「皆様こんにちは！　私はゲームナビゲーターのツムリです。ようこそ、デザイアグランプリへ！」
　声がした方を見ると、そこには箱を渡してきた白黒の女性がいた。聞いた限り、名前はツムリというらしい。
「今、私達の世界はジャマトの脅威に晒されています。何処から来るのか、何が目的なのかは分からない。ジャマトから町の平和を守る為、誕生したのがデザイアグランプリなのです！」
　ツムリの解説を、昴も含め皆呆然とした表情で聞いている。何人かはどうも物知り顔であるが。
「何だソレ～？　って感じですよね？　知らないのも無理はありません。平穏を保つ為、デザイアグランプリが終わるごとに人々の記憶がリセットされるように設計されているのです。記憶が蘇るのは、ＩＤコアを手にした人だけ」
　だから自分は記憶を失っていたのか、と昴は理解する。
「皆様は、〝仮面ライダー〟となってジャマトと戦うのです。そして、見事に勝ち抜いた……通称、〝デザ神〟は、自分の理想の世界を叶えることが出来ます！　要は、どんな

願いも叶うということです！」

胡散臭いと思っていたが、どうもマジのようである。恐らく口ぶりからするに、何度も行われてきてるのだろう。

「それでは皆さん、お手元のデザイアカードに、願いをご記入ください！」

すると昴の手元には、いつの間にか羽ペンと金縁の色紙があった。

周りをみる。皆、何か願いを書き込んでいるようだ。

（……俺の、願いか……）

昴はカードを見つめて思う。

――――やっぱり、あの人の子だな！

ある言葉が、スバルの脳裏に駆け巡った。

それが駆け巡った瞬間、スバルはカードに何かを書いた。

◇◇◇◇

「それでは、デザイアグランプリ第1回戦、監獄脱出ゲームを始めます！」

ツムリはゲーム名を告げる。

「今回、監獄に蔓延る囚人ジャマト達を撃退しながら、親玉囚人ジャマトを倒せば鍵を入手し脱出が可能となります。バックルを各自お配りしますのでそれでジャマトに対処を。それではミッション開始です！」

ツムリの一声と同時に、昴は青い光に包まれ転送される。光が晴れると、周りには牢屋が見える。ゲームの名の通り、監獄のようだ。それと自分の衣装も紺と黒のジャケットに変化していた。

昴が足元を見ると、ピンク色の箱があった。それを拾って蓋を開くと、何かが入っている。

「これは……プロペラか？」

入っていたのはプロペラレイズバックルであった。端っこに矢印が刻まれてるので、ドライバーに差し込んでみる。

『ＳＥＴ！』

バックルをドライバーの右側に装填すると、待機音が鳴り出した。プロペラを恐る恐る回す昴。

『ＡＲＭＥＤ　ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ！　ＲＥＡＤＹ　ＦＩＧＨＴ！』

「こ……これが仮面ライダー……！」

自分の変貌した体をペタペタと触る昴――――仮面ライダーアルデン。

全体的にスーツは黒色で、胸元にはプロペラのマークが描かれている装甲がある。手にはプロペラが握られていた。

そしてそのマスクは黒い牛を模したものだ。

「ジャッ！」
「ジャア～！」
　するとアルデンの目の前に縞々の服を着た囚人ジャマト２人が現れる。どちらも鉄パイプを持っていた。
「……とりあえずやるしかないか！」
　剣道をやったことはあるし、鍛えてもいるので戦いに多少の自信はある。アルデンはプロペラを突き出して構えた。
「……え!?」
　その時、突如プロペラが回転を始める。そのまま高速で回転したプロペラは前へ勢いよく前進しだした。
「おわーっ!?」
「ツバー!?」
「デデコー!?」
　アルデンとジャマト達の悲鳴が混じる。回転するプロペラにぶつかり左右に吹き飛んだジャマトは爆発したが、アルデンは壁にぶつかり転がった。
「いってぇ～……いきなりこれかよ!?　幸先良いのか悪いのか……」
　格好がつかない状態だが、結果的に敵は倒せた。

「キョトヅ！　ゼラスエロカカ！」
立ち上がると、囚人ジャマトが３人現れる。
「うし！　今度は決めるぞ！」
そう言ってアルデンは走り出し、プロペラの長さを生かし３人を一気に殴りつける。
『ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』
プロペラレイズバックルのプロペラを回すと、プロペラに灰色のエネルギーが纏われる。
それで３人を順番に殴りつけると、限界を迎えたのかそのまま爆発した。
「よぉし！　んじゃ、早く脱出しねぇとな！」
そう言ってアルデンは走り出し、監獄からの脱出を目指すのだった。

交錯ＩＩ：監獄脱出

「はああっ！」

菜月昴・仮面ライダーアルデンはプロペラで囚人ジャマトを殴りつける。後ろから来る敵にはキックだ。

『ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』

プロペラレイズバックルのプロペラを回す。装備品のレイズプロペラが回転し始め、その勢いでアルデンは５人の囚人ジャマトに突撃すると敵は全員吹き飛び、全員爆発した。最初は失敗したが、すぐにコントロール出来るようになったのである。

再び監獄の中を進み、親玉を探そうと走る。そして開けた場所に出た。

「おおっと……この人数はちょっとヤベェかも……」

そこには囚人ジャマトが１０人はいた。流石にこの人数となると少々まずい。ここは避けるか？　と一瞬思ったが、一体がこちらに気づくと他もこちらに気づいたので戦わざるを得なくなった。

どうにかレイズプロペラを使い敵を薙ぎ払う。鉄パイプを受け止めるが、後ろから複数で襲い掛かろうとするジャマトがいた。

しかし、突如としてその内の一体が吹き飛んだ。それに動揺した他のジャマトはアルデンを襲おうとする手を止めるが、それらも吹き飛んだ。アルデンは敵を倒すと、敵を倒した者を見ようと振り返った。

「君、大丈夫？」

それは、白い銃士だった。そしてその頭のマスクは狐を――――。

「……狸？」

緑色の、狸だった。

「ああ……俺は仮面ライダータイクーン、桜井景和。君は……仮面ライダーアルデンの菜月昴君かな？」

「アルデン？　ていうか何で名前を……」

聞き覚えのない名前と自分の名前が何故か知られてることに疑問を覚えるアルデンこと昴。

「スパイダーフォンで参加者の名前を見れるんだ、君も持ってるでしょ？」

桜井景和・タイクーンにそう聞かれ、懐を探るアルデン。すると、同じスパイダーフォンがあった。

画面を見れば、成る程確かに自身の名前とライダー名のアルデンが書いてある。

「とりあえず、早くここからの脱出を目指そう。それに、俺の知り合いもいるだろうから

途中で合流出来るかも」
「あ、はい！」
慣れてる感じがするので、彼はデザイアグランプリの経験者なんだろう。彼に従った方が良さそうだ。
◇◇◇◇
囚人ジャマト達を倒しながら移動するタイクーンとアルデン。
しばらく移動して、大きな広場みたいなところに出た。そこでは4人のライダー達が複数のジャマトと乱闘を繰り広げている。1人は紫の狐、1人は白鳥、1人は赤色の猫、1人は黒いライオンだろうか？
「何か奥で威張ってる感じのやつがいるけど……あれが親玉か？」
ライダーとジャマトが戦っている奥で椅子に足を組んで座っているジャマトがいた。他のジャマト達とは違い、紫色のウツボカズラのような頭をしている。
「てことは、あいつを倒せばクリアってことか！」
「そうだね。でもアイツは強いから気をつけて」
「分かってますよっと！」
「あっ、ちょっと！」
アルデンが駆け出したのを見た親玉ジャマト……もといルークジャマトは椅子から

立ち上がる。
　アルデンがプロペラで殴りかかる。が、少し体が動いただけで平気そうなルークジャマトはアルデンを蹴り飛ばす。
「ぐあっ！」
　蹴り飛ばされ地面に転がるアルデン。親玉だけあって強さは伊達ではないということらしい。
「ああっ！　だから気をつけてって！」
　タイクーンが転がるアルデンを見てそう言った。しかしルークジャマトに向き直り、武器を構える。
「いってぇ～……！」
「おいおいおい、大丈夫か兄ちゃん？」
　囚人ジャマトを倒したのか、黒いライオンのライダーがアルデンに駆け寄る。彼の装備は水色の蛇口が付いている長い棒だ。アルデンは知らないが、その名もレイズウォーターである。
「ああ……大丈夫だ、悪いな」
「そうかい。俺は藤原或馬、仮面ライダーレグラだ。狸の兄ちゃんと協力してボスを倒そうぜ？」

藤原或馬・仮面ライダーレグラが指を差す。その先には、タイクーンのマグナムシューター４０Ｘの銃口が火を噴いてルークにダメージを与えていた。
「僕らも協力するよ」
後ろから声が聞こえた。それは赤色の猫のライダーだ。後ろには紫の狐と白鳥のライダーもいる。
「僕は中村晴人、仮面ライダーフェリトだ。この２人は……」
「私は江口優里、仮面ライダーアンセア」
「堀江笛李、仮面ライダーデネクだよ。よろしくネ～」
「えっと、俺は菜月昴！　仮面ライダーアルデンだ、よろしくな！」
猫はフェリト、狐はアンセア、白鳥はデネクらしい。順にハンマー、アロー、シールドを装備していた。それぞれ自己紹介をし、アルデンも名乗った。
「そいじゃ行こうぜ、狸の兄ちゃんばかりに戦わせちゃいられねぇし」
レグラがそう言った。
ルークと接近戦になっていたタイクーンが後ろに飛び距離を取る。そのタイミングで、アルデンとレグラとフェリトとデネクが攻撃。アンセアは遠距離からアローで撃ち援護する。
「景和さん！　この人たちが加勢してくれるみたいです！」

「よし！　これだけの数なら！」
　アルデンとタイクーンが勝ちを確信した時だ。
「ジュラピラ……」
　２体のポーンジャマトがいることにタイクーンが気づく。そしてそのジャマト達は、デザイアドライバーを持っていた。
「ッ！　まさか」
「「ヘンシン」」
　デザイアドライバーを装着したジャマトが、黒色のバックルをセットする。
『ＪＹＡ・ＭＡ・ＴＯ』
　ポーンジャマトの体を緑色の蔦で覆われると、あっという間に禍々しいマスクとアーマーが装着されていた。その名もジャマトライダー。
「ジャマトライダー……！　こんなタイミングで！」
　そう言ってるタイクーンにジャマトライダーの1体が襲いかかる。もう1体は、ルークと戦うアルデン達に襲いかかる。
　ジャマトライダーはタイクーンが現在使っているマグナムフォームのような大型バックルであれば対処は可能だが、小型のバックルだと手強い相手になる。
「ぐあっ！」

「うわあっ!?」
　レグラとデネクがジャマトライダーの標的となった。首元を掴まれ地面に投げ飛ばされる。
「笛李!　くっ!」
　アンセアはアローで迫るジャマトライダーに攻撃するが、そこまで効いている様子がない。
「まずいな……」
「くそっ、どうすりゃ……」
　ルークと戦うが苦戦気味のフェリトとアルデン。
「くっ!　どけ!」
　タイクーンは皆を助けてやりたいがジャマトライダーは面倒だ。ライダーになったことにより元の怪力や防御力が強化されている。故に苦戦こそしないが倒すのに時間はかかる。
　アルデンは考える。どうすればこの状況を潜り抜けられるのか。だが、名案は思いつきそうもない。
「……おらーっ!」
「ジャ!?」

突如としてアルデンはルークジャマトに突進しプロペラで壁に押さえつける。
「晴人！　３人を！」
「だが君が！」
「どうにかなる！　早く！」
「……分かった！」
『ＨＡＭＭＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』
フェリトはバックルのハンマーを押し込む。レイズハンマーにピンクのエネルギーが纏われる。
「はあっ！」
駆け出したフェリトが後ろからジャマトライダーの頭を殴りつけ、横に吹っ飛ばす。
「笛李！　大丈夫か!?　そちらの君も！」
「晴人……！」
「腰に効いたぜ……」
フェリトがデネクとレグラに安否を尋ねる。
「ぐっ！」
プロペラが振り払われ、ルークジャマトに首を掴まれるアルデン。
（ヤバい……ッ！）

このままでは……と最悪の予想をするアルデン。だが、それでも蹌こうとプロペラでルークを殴る。

「っ……！　離せ……！」

何としても願いを叶えたい。――――この停滞した人生を、やり直す為に。

「俺は……ッ！　諦められねぇんだっ！」

アルデンがそう叫んだ時。

突如としてルークジャマトが吹き飛び、アルデンは解放される。

尻餅をついたアルデンは、自身を助けた者を見上げる。その者は――――白い狐のマスクを装着していた。

「――――よく諦めなかったな。諦めなければ、願いは必ず叶う」

白い狐は尻餅を付いているアルデンを見下ろしてそう言った。

「アン、タは……」

「英寿！　遅いよ、何処にいたの!?」

タイクーンが叫ぶ。英寿と呼ばれた白い狐は振り返った。

「こいつを手に入れるのに少し手間取ってなァ。それに、ヒーローは遅れてやってくるって言うだろ？」

そう言って大型の赤いレイズバックルを取り出す白狐。

「えい！」
　フェリト達の前にいたジャマトライダーは何者かに斬られる。どうやらそれは金色の猫のマスクを装着し、ギターを持っている者だった。
「景和！　助けに来たよ！」
「祢音ちゃん！」
　祢音と呼ばれた猫のライダー、その名も、仮面ライダーナーゴ。変身している姿は大型のビートレイズバックルによるビートフォームだ。その手に持っているギターの名はビートアックス。
「ふっ！　はあっ！」
　白狐がルークジャマトを斬りつけ蹴飛ばす。
「タイクーン！　ニンジャをやる！　代わりにマグナムを！」
「分かった！」
　敵を撃ち、マグナムレイズバックルを外して投げ渡すタイクーン。受け取った白狐もニンジャレイズバックルを取り外しタイクーンに投げ渡した。
『ＳＥＴ！』
　タイクーンはジャマトライダーの攻撃を避けながらニンジャレイズバックルをドライバーに装填し、そのままレバーを引いた。

『ＮＩＮＪＹＡ！　ＲＥＡＤＹ　ＦＩＧＨＴ！』

タイクーンに緑色のアーマーが纏われ、その手には新たなる装備が。その名もニンジャデュアラー。分割してツインブレードのモードにする。

「アルデン！」

「えっ、あっ、俺!?」

「タイクーンに加勢してやれ。こいつは俺が相手をする」

「あっ……はい！」

白狐にそう言われ、タイクーンの元へ立ち上がり駆け寄るアルデン。

何も装備していない、いわゆるエントリーフォームになってる白狐はルークジャマトに向き直り、ドライバーにマグナムレイズバックルと、赤いレイズバックル――――ブーストレイズバックルを装填する。

『ＳＥＴ！』

マグナムのリボルバーを回してトリガーを引き、ブーストのハンドルを二度回した。

『ＤＵＡＬ　ＯＮ！　ＧＥＴ　ＲＥＡＤＹ　ＦＯＲ！　ＢＯＯＳＴ！　ＡＮＤ！　ＭＡＧＮＵＭ！』

白と赤のアーマーが装着され、白狐はマグナムブーストフォームへ変身した。

『ＲＥＡＤＹ　ＦＩＧＨＴ！』

「さぁ……ここからが、ハイライトだ！」
マグナムシューター４０Ｘをルークジャマトに向けた白狐――――仮面ライダーギーツは、引き金を引いた。
◇◇◇◇
「よし、皆！　もう一息だよ、頑張ろう！」
ナーゴはそう言ってバックルのセレクトケンバーンを押す。するとナーゴのアーマーから音楽が流れ始める。その音楽は他のライダー達の体に染み渡るようで、みるみる内に活気を与え始める。
「おおっ!?　何か力が漲ってくるみてぇだ！」
そう声に出したのはレグラだ。
「ありがとうございます！　優里、笛李！　この勢いで行こう！」
ナーゴに礼を言ったフェリトがアンセアとデネクに言う。言われた２人もそれに頷いた。
『ＨＡＭＭＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』
『ＡＲＲＯＷ　ＳＴＲＩＫＥ！』
『ＳＨＩＥＬＤ　ＳＴＲＩＫＥ！』
『ＷＡＴＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』

それぞれバックルを操作。

『ＪＹＡ・ＪＹＡ・ＪＹＡ・ＳＴＲＩＫＥ!』

ジャマトライダーがバックルを押して足を地面に叩きつけると、太い蔦が出現しライダー達を倒さんとする。

だがデネクが構えると巨大なアームドシールドのエネルギーが出現しそれを防いだ。シールドが解けると、アンセアのアローからエネルギーの矢が放たれ、レグラのウォーターから高水圧の水が放たれる。

「はああっ!」

フェリトが飛び上がりエネルギーを纏ったハンマーをジャマトライダーの身体に叩きつけ、相手を後ずらす。

『ＲＯＣＫ　ＦＩＲＥ!』

ナーゴはエレメンタドラムを押し、ストラムレバーを弾く。ロックファイアのモードがセレクトされた後、インプットトリガーを押す。

『ＴＡＣＴＩＣＡＬ　ＦＩＲＥ!』

ビートアックスの刀身に炎が纏われ、ナーゴはそれを振るいジャマトライダーに斬撃を飛ばす。それを受けたジャマトライダーは蓄積されたダメージに耐えきれず爆発四散。

「はああっ！」
　タイクーンとアルデンがジャマトライダーと交戦。ニンジャデュアラーとレイズプロペラを押し付けられ後ずさるジャマトライダーだが、弾き飛ばしパンチをする。しかし２人はそれを避ける。
『ＮＩＮＪＹＡ　ＳＴＲＩＫＥ！』
『ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』
　タイクーンとアルデンは自身のバックルを操作する。まずアルデンが回転するプロペラをジャマトライダーに向けて飛ばした。
「ふっ！」
　タイクーンが忍者のように手を組むと忍術が発動され、プロペラが分身。複数のプロペラがジャマトライダーに当たりダメージを与える。
「はああっ！」
　最後にタイクーンが飛び上がり、足にエネルギーを纏ったキックを放つ。ジャマトライダーはバックルを操作しパンチで対抗しようとするが、蓄積されたダメージにより打ち勝てず、タイクーンのキックを受け爆発。
　場面は監獄の外へ。
「はあっ！」

ルークジャマトの攻撃を難なく避け、ギーツはブーストのマフラーを噴かしその勢いでキックを放つ。それにより吹き飛んだルークにシューターで追撃。

『ＲＥＶＯＬＶＥ　ＯＮ！』

ギーツはデザイアドライバーを半回転させ、リボルブオンを発動する。

するとギーツは輪上のリボルブリングに包まれ宙に浮き、マスクが外れて頭部が引っ込む。身体は時計回りに１８０度回転し、再び頭部が出現してマスクが装着。

ブーストが上、マグナムが下と、アーマーの位置が変化した。

「はあっ！」

駆け出したギーツはルークにワンツーパンチ、噴いたマフラーの勢いにより威力は増している。足装備のガンスリンガーレッグからアーマードガンを展開し、足を上げてルークに放つ。

その後ギーツは再びリボルブオンを発動して、元の状態に戻る。

『ＢＯＯＳＴ　ＴＩＭＥ！』

マグナムとブーストのバックルを操作。

そして再びブーストを操作する。

『ＭＡＧＮＵＭ！　ＢＯＯＳＴ！　ＧＲＡＮＤ　ＶＩＣＴＯＲＹ！』

「盛大に打ち上げといくか！」

ギーツは天高く飛び上がる。やがて全身に赤い炎を纏ったギーツはルークジャマトにキックを放つ。ルークはそれに抵抗は出来ず、キックを受け、盛大に爆発した。
「おっと」
ブーストレイズバックルから煙が噴き出す。すると思い切りギーツのデザイアドライバーから外れ、そのまま何処かへ飛んでゆく。
「うわあっ!?」
「景和さん!?」
ブーストレイズバックルはわざわざ監獄の中まで飛びタイクーンの頭にぶつかった後、完全に何処かへ飛び去った。
「これか」
ギーツはルークジャマトが爆発した後に残った小箱を開く。そこには鍵が。
『ミッション、コンプリートです！　皆様、門の前まで集まってください！』
ツムリのアナウンスが響く。ギーツやアルデン達は出口に向け移動を始めた。
◇◇◇◇
「皆様、お疲れ様でした。これにて一回戦は終了。再びジャマトが現れましたら、デザイアグランプリは再開致します。それまでご自由に」
ツムリから参加者達はそう案内を受ける。

デザイア神殿には昴や景和を含む参加者達が集っていたのだ。しかし、昴はある違和感に気づく。

「何か……人数が少し減ってるような……？」

そう、最初は２０人はいたはずなのに、今は１５人くらいになっているのだ。

「リタイアしたんだ、ジャマトによって」

昴の質問に誰かが答える。その誰かの方を昴は見た、それと同時に驚愕をした。

「あ、アンタは……スター・オブ・ザ・スターズ・オブ・ザ・スターズの浮世英寿（うきよえーす）さん!?」

「何だ、俺のファンか？」

「あ、ファンは俺の母です……」

そう言って訂正する昴。彼の目の前にいる男は、浮世英寿。彼は世間ではスーパースターの有名人であり、ファンからも『英寿様』と呼ばれ慕われている。昴の母である菜月菜穂子もファンらしい。

「で、さっきのってどういう……」

「ジャマトによってリタイアさせられると、この世界から退場させられる」

「へっ？」

昴は思わず間抜けな声を出す。

つまり、ここに居ない人は、死んだ？

「あの、ツムリさん……マジすか？」
「はい、そうです。デザイアグランプリは命を懸けたゲームですので」
ツムリのその一言に、場は凍りついた。同時にすぐにどよめきは起こる。
「おいおい……そんなん聞いてねぇぞ……」
サングラスとマスクをしている一見怪しい風貌の男――――藤原或馬は呟く。
「……っ」
景和は自身の拳を握りしめた。
「ですので皆様、くれぐれも……ご退場しないよう、お気をつけください」
ツムリは参加者全員にそう告げる。
「……」
昴は理解した。
自分は――――とんでもない所に飛び込んでしまったということを。

交錯ＩＩＩ：祈願願望

命あっての物種、なんて言葉がある。何事も死んでいては意味がない、というような意味だ。

巨万の富や尊敬されるべき名声、絶対なる力、自身に沢山の異性を侍らせたりするいわゆるハーレム――――等々、例外はあるかもだが、大体は生きて得てこそ意味がある。

デザイアグランプリはその言葉が最も似合うと言っても過言ではないだろう。

叶えるにせよ、叶わないにせよ。生きていればチャンスはあるが、死んでいては二度とチャンスは来ない。

退場者には、死者には、何の権利もない。

「……」

なんてことを、菜月昴は帰宅した自室のベッドに座りデザイアドライバーとプロペラレイズバックルを手に持って考えていた。

昴はゲーム内でジャマトに首を絞められた。その時はヤバい、とは思っていたが、内心ではどうにかなると思っていた。

どんな願いも叶えたり、様々な人間から記憶を消したり、仮面ライダーという力を与

えたりと、人外染みたことをしているのだから、多分大丈夫だと思っていた。
だが、どうにかはならない。
その後も説明は受けた。デザイアグランプリ――――略してデザグラによって出てしまった一般人の犠牲者は世界がリセットされると蘇生されるのだが、ライダーの場合は蘇生はしないのだという。
ゲームはゲームでも、コンテニューは無しなのだ。
「……でも、引けねぇよな」
死ぬのは怖い。きっと痛いし苦しいだろうし、その後どうなるか分からないから怖い。
でも、引けない。人生をやり直すチャンスを恐怖に負けて、投げ出すわけにはいかないのだ。
とはいえもしものこともあるし、遺書でも書いておこうか、なんて冗談ながらに思う。
『ＧＡＴＨＥＲ　ＡＲＯＵＮＤ』
すると、昴のポケットの中にあるスパイダーフォンから通知音声が鳴る。デザグラ運営からの呼び出し…の合図だ。
「……行くか」
その目に決意を宿し、昴は立ち上がった。デザイア神殿は何処からでもアクセスは出

来るが、家の中からだと母親を心配させかねないので外に行こうとする。
「昴？　何処か出かけるの？」
ちょうど昴は菜穂子と玄関の前で居合わせる。
「ああ……散歩でもしようかなーって」
嘘だ、これから命懸けの戦いに挑みに行くのだ。自分の願いという名の、エゴの為に。
「そっか。コンビニに行くならエクレア買ってきてね」
「……うん」
場合によっては買えないかもしれない。だが、エクレアの約束をする。
「……行ってくる」
昴は扉を開けて外へ出ようとした。
「昴」
菜穂子に呼ばれ、振り返った。
「いってらっしゃい」
そう言って菜穂子は微笑み手を振った。
「……いってきます」
無理矢理だったかもしれない。
それでも昴は小さく微笑み、そう言って外に出た。

◇◇◇◇

デザイア神殿には参加者達が集っていた。

命懸けだったと分かっても、自分と同じように皆願いは叶えたいらしい。

「新たなジャマトが現れました。これより第二回戦を始めます」

案内をしたツムリの後ろにジャマーエリアと書かれたホログラムが映る。ある地区のマップに赤いサークルがあり、そこにジャマトが現れたという証拠だ。

「第二回戦、その名も『ナワバリゲーム』！」

ツムリがゲーム名を告げる。それと同時に、昴は青い光に包まれ何処かへ転送された。

『各ポイントに設置された旗をチームで足軽ジャマトから防衛してください。旗を取られた時点でチームごとプレイヤーは脱落となります』

「海賊ゲームみたいなもんか」

同じく転送された英寿が、近くにあるデザグラのロゴがプリントされてる白い旗印を見て言った。

『ちなみに、今回出現するジャマトの中にはボックスを持っている個体もいます。倒して手に入れたアイテムを有効活用してください。それではミッション開始します！』

ツムリのその一声と共に、戦国時代にいたであろう足軽の格好をしているジャマトが

現れる。その手には槍を装備していた。
「ジャ～！」「ジャ！　ジャ！」
「菜月くん、笛李、協力して乗り切ろう」
「は、はい！」
「さーて、頑張っちゃおっと！」
優里と昴と笛李の３人はレイズバックルをその手に持ち、デザイアドライバーにセットする。
『『ＳＥＴ！』』
一方、別の場所にいた景和と晴人のところにもジャマトは出現していた。
「景和さん、行きましょう！」
「うん！」
『『ＳＥＴ！』』
更に別の場所には、英寿とナーゴの変身者である鞍馬祢音と或馬が。
「ナーゴ、レグラ、行くぞ」
「うん！」
「うーし」
『『ＳＥＴ！』』

バックルをそれぞれセットした後、各自変身ポーズを取る。ちなみに昴は左手を腰に当て、右手は天を指さすように伸ばしていた。

「「「「「「変身！」」」」」」

バックルを操作。音声が鳴る。

『ＡＲＭＥＤ　ＡＲＲＯＷ！』

『ＡＲＭＥＤ　ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ！』

『ＡＲＭＥＤ　ＳＨＩＥＬＤ！』

『ＡＲＭＥＤ　ＨＡＭＭＥＲ！』

『ＮＩＮＪＹＡ！』

『ＭＡＧＮＵＭ！』

『ＢＥＡＴ！』

『ＡＲＭＥＤ　ＷＡＴＥＲ！』

全員の身体が黒いスーツに包まれ、各自、装備が装着される。

『ＲＥＡＤＹ　ＦＩＧＨＴ！』

戦いの合図が鳴った。

◇◇◇◇

「はあっ！」

「でやっ！」
仮面ライダーアルデン・アームドプロペラと仮面ライダーデネク・アームドシールドはそれぞれレイズプロペラとレイズシールドを使い足軽ジャマトを殴打する。
「ジャアッ！」
「ッ！　しまっ……」
視覚外からのジャマトの攻撃に気付くアルデン、しかしガードが間に合わない。
「ふっ！」
「ジャア～！」
だが、ジャマトは緑のエネルギーの矢を喰らい吹っ飛んだ。
矢が飛んだ方を見ると、仮面ライダーアンセア・アームドアローがいた。彼がレイズアローで旗の地点から矢を撃ってくれたようだ。
「援護は任せてくれ！　君は目の前の相手に集中するんだ！」
「分かりました！　ありがとうございます！」
礼を言って、ジャマトとの戦いに戻るアルデン。頼もしい仲間がいるのは嬉しいことである。
「やあっ！」
ニンジャデュアラー・ツインブレードでジャマトを切り裂くタイクーン・ニンジャ

フォーム。
「ふっ！」
　レイズハンマーで叩きつける仮面ライダーフェリト・アームドハンマー。ジャマトの顎を下からハンマーで殴りつける。
「にゃー！」
「どりゃー！」
　ビートアックスで斬りつける仮面ライダーナーゴ・ビートフォームとレイズウォーターで殴る仮面ライダーレグラ・レイズウォーター。
「はあっ！」
　仮面ライダーギーツ・マグナムフォームがマグナムシューター４０Ｘで足軽ジャマトを撃つ。
「ジャ～！」
　叫んで地面に転がり爆散するジャマト。その後、その場にマゼンタのミッションボックスが転がり落ちる。
　ギーツはボックスを拾い上げ蓋を開く。そこには、金色の大型レイズバックルが。
「ほう」
　箱の中に入っていたそれの名はフィーバースロットレイズバックル。

『ＰＲＯＰＥＬＬＥＲ　ＳＴＲＩＫＥ！』
「はあああああっ！」
高速で回転するプロペラによって前進し、その勢いでジャマトを纏めて片付けるアルデン。
『第一ウェーブ、終了でーす！』
ツムリのアナウンスが聞こえて、安堵したアルデンは息を吐いた。
◇◇◇◇
「ふぃ～、疲れたぁ」
どかっと赤いソファーに座り込む昴。
一同はデザイア神殿の休憩所であるサロンに集っていた。
ルールとしてサロン内では一切の戦闘行為は禁止されており、違反者は即脱落となる。
サロン内を見渡した昴は、参加者の数が少なくなっていることに気付いた。まさか退場者が……なんてことを思う昴だったが。
「あの、ツムリさん。さっきの戦いで退場者は……」
「旗を取られたことによる脱落者がほとんどです。犠牲になった方々はいませんのでご安心を」

「そうですか……」
　昴の横では、景和とツムリがそんな会話をしていた。ツムリの言葉を聞いて、安堵の顔を浮かべる景和。その会話を聞いた昴も、内心ほっとする。
「退場者の心配か？　タイクーン」
「英寿」
　英寿が景和に声をかける。
「そう神経質になるな。デザ神になれば、退場者を復活させることが出来るからな」
　気休めのつもりか、そうでないのか分からない態度でそう言う英寿。
「確かにそうかもしれないけど……でも、助けられたかもしれないのにそれが出来なかったのは悔しいよ」
「今のお前が助けられる範囲にも限界はある。全てを救えるのは神だけだ。退場者を復活させたいなら、勝ってデザ神になるしかない。ま、今回も勝つのは俺だけどな」
「……いいや、今度は俺が勝つよ。勝って、犠牲になった人々を助ける」
「私のことも忘れないでよー？　私だって負けないんだから！　ね、景和？」
「ふふ……そうだね、祢音ちゃん。一緒に頑張ろう」
「ふっ……仲が良いな。まるで彼氏彼女みたいだな？」
「かっ、彼女じゃないから！」「かっ、彼氏じゃないから！」

英寿にそう揶揄われた景和と祢音は慌てて否定する。
昴はそのやり取りよりも、有名人二人と景和が知り合いなことに軽く驚いていた。
有名人二人とは、スターである英寿は勿論、祢音もそうであった。彼女は『スーパーセレブ祢音ＴＶ』を配信している動画配信者であり、チャンネル登録者は１０００万人を超えるかなりのインフルエンサーだ。昴も家で動画漁りをしてる時に見かけたことがある。
「菜月くん、先の戦いはお疲れ様。次もお互い頑張ろう」
そう言って声をかけたのは中村晴人だった。整った顔で尚且つ爽やかな笑みで言うものだから、自分が女性だったら軽く惚れてたかもしれない。
「ああ……はい、そうっすね。頑張りましょう」
「優里も笛李も、お互い頑張ろう」
「お互いネ～。一応、フェリちゃんたちは蹴落とし合うライバルなんだけどネ」
「そう言うな笛李、ライバルだろうと気遣えるのは晴人の良いところだ」
笛李が皮肉を飛ばすが、すかさず優里は晴人をフォローする。
ぐぅ～。
そんな会話をしてる時、誰かの腹の虫が鳴った。
「あー……すいません。戦ったせいでお腹減ったみたいっす」

音の元はどうやら昴のようだ。本人は照れたように頭を掻く。
「ここって何か食べ物とかないのかな？」
「ありますよ。今なら食べ放題フェアが開催中なので、色んな料理が食べれます」
「えっ、マジで……すか……」
昴は声がした方へと振り向いた。だがそこには、異様な雰囲気を纏う人物が居た。服装はきっちりとした黒いスーツで固められていて異常はないが、顔部分に問題があった。
顔には、フード付きのショートケープを羽織り、更には骸骨を模したマスクを被っていたのだ。上部分は白く、下部分は青色になっている。
昴はその異様な容姿を見て、口をぽっかり開けて呆然とする。
「だ、誰……？」
「お初にお目にかかります。私はこのデザイアグランプリのゲームマスターを務めるアワスという者です。以後、お見知りおきを」
しばらくして問いかけた昴に、アワスと名乗った男は手を後ろにやり丁寧に腰を曲げお辞儀をする。
「は、はあ……ご丁寧に、どうも」
昴は戸惑いながらも、会釈で返す。

その後、アワスは英寿達の元へ赴く。
「浮世英寿様、桜井景和様、鞍馬祢音様。この度は前ゲームマスターであるギロリがご迷惑をお掛けしました。彼に代わって、深くお詫び申し上げます」
アワスは英寿達に謝罪の言葉を告げた後、再びお辞儀をして頭を下げた。
「へぇ、これは御丁寧に。どうやら今回のゲームマスターはちゃんと筋を通してくれそうだな。不正が無いように頼むぞ」
「勿論でございます」
「それと、きつねうどんを一つ」
「じゃあ俺は、たぬきそば」
「私はサンドイッチで！」
「かしこまりました」
英寿がきつねうどんを注文した後に、景和と祢音も料理を注文する。他のメンツも、それを皮切りに料理を注文していくのであった。
その後しばらくして、料理がカートに乗せられて運び込まれた。
「ごゆっくりどうぞ」
そう言ってお辞儀をした後、アワスは扉から去った。
「マヨネーズを……っと。いただきまーす」

昴は注文したチキン南蛮丼にマヨネーズをかける。その後、箸を取って手を合わせて食事を始める。

晴人はおでん、優里は稲荷寿司、笛李はミートソースパスタ、或馬はチャーシュー麺をそれぞれ食べていた。

「……そういえば気になったんすけど、皆さんはどんな願いを書いたんですか？」

食事中、ふと気になったことを昴は晴人や景和達に聞いた。

「おおっ、気になっちまうかあ？　そこまで言うならしょうがねえなあ。俺の願いは億万長者になって美人でボインなねーちゃん達と酒池肉林出来る世界だっ！」

「は……はあ……」

別にお前には聞いてねえよ。唐突に話に入ってきた或馬に向けてそう思った昴。

「あはは……俺の願いは……デザイアグランプリの退場者達が蘇った世界。……今度こそ、絶対に叶えるんだ」

或馬に苦笑いしながら、景和が最初に己の願いを告げた。一応、先程の会話を聞いて景和の願いを昴は薄々察してはいた。しかし、最後の言葉を言った景和は穏やかな雰囲気の中に強い決意が表れていた。

「私は……本当の愛」

次に祢音が自身の願いを言った。先程までの活発そうな態度とは打って変わって神

妙な面持ちでそう言った。
「……そうだね、僕の願いは……父と仲直りできた世界、かな」
「……お父さんと仲悪いんすか?」
晴人の願いを聞いて、失礼かもと思いながらも訪ねてみる昴。
「はは……実はそうなんだ。……お互いに少し、すれ違いがあってね。もしも優勝できたなら、前のように……」
何処か遠い所を見つめるような眼差しをしている晴人。
「……私の願いは、大切な人の記憶を取り戻すことだ」
「え……? その人、記憶喪失なんですか?」
優里が己の願いを言って、昴は率直な疑問をぶつける。
「ああ……。少し前に事故に遭ったんだ。その方の命に別条はなかったものの、自分の名前以外の記憶を一切忘れてしまった……」
「……」
「私はあの方に記憶を取り戻してほしい。だから何としてでも……勝たなければならないんだ」
「優里さん……」
優里の目には決意が宿っていた。その目を見て昴も彼の強い意志を感じ取っていた。

「……ええっと、笛李さんの願いは？」
「え～？　フェリちゃんの願い、気になっちゃう～？」
昴から問いかけられ、勿体ぶるようにそう言う笛李。
「教えてあげよっかな～、どうしよっかな～……。そだ、昴きゅんの願いを教えてくれたら考えたげる！」
「……俺の願い？」
笛李からの交換条件に思わずオウム返しで呟く昴。
「そそ。どんな願いなの？」
「……俺の願いは……ええと……」
昴は答えにくそうに口籠る。だが、意を決したのか告げる。
「……人生をやり直すこと、ですかね」
「……何か重そうな感じだネ？　……理由聞いても良い感じ？」
口調は先程までと変わらないが、昴の願いに重いものを感じ取ったのか一歩引いて訪ねる笛李。
「実は俺……このデザイアグランプリに参加するまで、不登校だったんすよ。高校デビューに盛大に失敗しちまって、クラスから完全に仲間外れになって……。そんな日々に耐えかねて、寝坊したある日に学校を休んで。それでズルズルいって、完全に不登校

児に転落、って訳です」

自嘲するように己の人生の失敗談を語る昴。

「それからはゲームしまくるだけで変わろうとしないクソみたいな生活続けて、親にまで迷惑かけて……何もかも嫌でした。クソみたいな生活も、変わろうともしない自分も。早くこんな自分なんか見切りつけて見捨ててくれって、何度両親に思ったことか。……そんな時に、デザイアグランプリにエントリーできる権利が与えられたんです」

あの日、ドライバーとＩＤコアを受け取った。昴にとってそれは正に転機であった。

「願いが叶えられるって分かった時は、胡散臭いって思ったけど、チャンスだって思った。もしかしたら、今の停滞してる人生を変えられるかもって。父さんと母さんに、もう迷惑かけずに済むかもって」

昴は最初にデザイアカードに願いを書いた時のことを回想する。そこには、こう書いてあったのだ。

『俺が菜月賢一のような人間になっている世界』

奇しくもその願いは、自分が小さい時に抱いた願いとほぼ同じであった。

昴は自分の人生を回想する。

小さい時は何でも出来ていた。それ故に、周りの大人も褒めてくれた。

やっぱり、あの人の子だな。と。

あの人とは父である賢一。昴にとって父は憧れの人間で、その人の息子だと褒められることは昴にとって嬉しいことだった。

でもいつからか、自分は何でも出来なくなり始めた。今まで勉強でも運動でも一番だったが、自分を抜かし始める者が現れ、一番になることはなくなっていった。

自分は父の子なのだ、こんなことあるはずが無い。幼さ故に、事実を認めることができなかった。

昴は今度は派手なことをやり始めるようになった。友人たちと夜の学校に忍び込む、白線を町中に引き回る、危険な野良犬を追っ払う。

そんなことをして、自分の居場所を守ろうとした。

だが派手なことを続けていくうちに、それに付き合いきれない友人が出始めた。最終的に、昴は一人になった。

今まで自分はすごい奴だと、特別な人間だと思い込んでいた。でも一人きりになって、それは全部まやかしなのだと気付かされた。

やっぱり、あの人の子だな。

それはいつしか呪いの言葉になっていた。菜月賢一の子である自分が凡庸な人間だと気づいてしまったからだ。

それからの昴は、小中学は目立たないようにして過ごした。

そして、高校に進学。進路のあれこれ故か、周りに同級生はほとんど居なかった。
そして……最初に昴が語った通り、高校生活に失敗して引きこもりになって今に至るのだ。
今になって、自分は全く空気の読めない奴だったと自覚している。テンションの高いキャラとして売り込んでいくにしても、節度を弁えるべきだ。それを分からずに昴は最初からバッドコミニュケーションをしてしまっていた。
「……あはは、何かすいません。長ったらしい自分語りなんかしちゃって。……別に、面白くもなんともないのに」
「そんなことないよ。その人の願いも、それを願う理由だってそれぞれだから。面白く無いなんてないよ」
「……ありがとうございます」
景和からの励ましに礼を言う昴。その後、笛李の方を見た。
「それで、笛李さんの願いは結局何なんですか？　話したんですから教えてくださいよ」
「んー、フェリちゃんの願いはー……秘密でーす！」
「ええ!?　願い言ったら話すって……」
「考えたげるって言っただけで話すとは一言も言ってないからネ！　ちゃーんと行間を読まなきゃ！」

「ぐぬぬ……」
「あはは……」
「全く笛李は……」
　晴人は苦笑いし、優里は呆れた表情を浮かべていた。
「でも、これだけは言えるかな――――叶えたい願いのためなら、フェリちゃんは命だって賭けられるよ」
　笛李はそう言い切った。先程までのおちゃらけた態度から打って変わり、その表情からは決意が感じられた。
　それだけで、笛李の願いは本人にとってそれほど価値のあるものだと分かった。
「そういえば、英寿の願いは？」
「〝俺がデザイアグランプリのゲームマスターになっている世界〟だ」
　英寿は景和に聞かれそう答えていた。
「皆、色んな願いを持ってるんですね……」
　昴は呟く。
「そうだ。そして、それを叶えられるかどうかもそいつ次第って訳だ」
　声をかけてきたのは、英寿だった。
「諦めればそこで終わり。だが諦めなければ、いつか願いは叶う。そういうもんだ」

そういうものなのだろうか。諦めなければいつか叶う。言うのは簡単だが、成し遂げるのは困難なことだ。

今までの自分を変えれるチャンスではあるのだろう。それでも、何もやってこなかった自分にそう都合の良いことがあるものなのかと、そんな不安もあるにはある。

自分は願いを叶えられるのかと、勝ち抜けることができるのかと。生き残ることは、出来るのかと。

「だから、必ず勝ち抜けると信じろ」

そんな自分の思いを吹き飛ばすかのように、英寿の言葉が飛ぶ。

彼の言葉とその真剣な面持ちに皆も同じような表情となる。

「……そう、だよな。信じねえとな」

昴は自分に言い聞かせるように呟いた。

◇

第二ウェーブ、開始。

「はあああああっ！」

ジャマト達を相変わらずプロペラで殴りつけるアルデン。

デネクはシールドで殴りつけ、アンセアは旗の付近からアローで遠距離射撃による援

護。
「ふっ！　はっ！」
　フェリトがアームドハンマーで次々と敵を殴打する。
「やあーっ！」
　タイクーンがニンジャデュアラーで敵を切り裂く。
「そらよっ！」
「にゃーっ！」
　レグラとナーゴはそれぞれの得物でジャマトと戦闘中。
「さて、運試しと行くか」
『ＲＥＶＯＬＶＥ　ＯＮ』『ＳＥＴ　ＦＥＶＥＲ』
　ギーツはデザイアドライバーを回転させフィーバースロットレイズバックルを取り出しセット。
　ゴールデンレバーを引いてスロットリール〝レイズジャックポット〟が高速回転。
　出てきた絵柄は――――、
『ＭＵＧＮＵＭ』
『ＨＩＴ！　ＦＥＶＥＲ　ＭＵＧＮＵＭ』
「フッ……当たりだな」

ギーツの装甲は上下ともマグナムとなり、マフラーは金色に変化。フィーバーマグナムフォームに変身した。

「さあ……ここからが、ハイライトだ」

シューターの銃口をジャマトに向け、引き金を引いた。

左から迫り来る敵に、もう一丁のマグナムシューター４０Ｘを構え引き金を引く。二丁拳銃スタイルだ。

「はっ！　はああっ！」

アルデンは、昴は、ジャマトを殴る中で思っていた。

（そうだ……俺は……勝ち抜くんだ！）

自分が勝利することを。

「ふんっ！」

回し蹴りをしながら足のアーマードカンで敵を撃ち抜くギーツ。

ギーツはレバーを引いた。

『ＧＯＬＤＥＮ　ＦＥＶＥＲ　ＶＩＣＴＯＲＹ』

リールが高速回転した後に音声が。四肢のアーマードガンを全て展開し、構えるギーツ。

その後は高く飛び上がりガンで乱射する。発射された光弾は全てジャマトに命中し、

あっという間に一掃した。
『2回戦、終了でーす！』
一掃したと同時に、ツムリからのアナウンスが聞こえた。
◇
「ただいま」
「お帰り、昴」
洗面所から出てきた菜穂子が昴を出迎えた。大方、洗濯を入れてたのかもしれない。
「ほい、エクレア」
帰りにコンビニで買ったエクレアが入った袋を菜穂子に渡す。
「あら、ありがと～。でもさっき自分で買ってきちゃったのよね～」
「じゃ、そのまま2個目と行っとこーぜ」
「うん、そうしようかしら。甘いものはいくら食べてもカロリー0だからね～」
「いやんな訳ねーから。何処ぞのお笑い芸人のギャグかよ」
昴のツッコミをよそに機嫌よくエクレアを手にリビングに入る菜穂子。昴は階段を登り自分の部屋へ行った。
部屋に入った昴はベットにどすんと倒れ込み、横たわる。
「手に入れたの小さいやつかー……」

昴は戦いの中で新たに手にしていた小型バックルを見る。それはチェーンアレイバックル。鉄球に繋がった鎖を使って遠くの相手に攻撃したり、直接殴るといった攻撃ができる。

「不安だったけど……2回戦も突破出来てるんだ。どうにかなるよな」

先の戦いで残ったのは食事の時に居たメンバーで、他は脱落したらしい。現状、死傷者は1回目の監獄ゲームの時にしか出ていないという。

（……脱落者や退場者の人には悪いけど……俺にも叶えたい願いはあるんだ。気にしてやれる暇はない）

自分が蹴落とした……訳ではないものの、願いを道半ばで叶えられなかった人は沢山いる。

しかし、それは振り切らなければならない。彼らに負い目を持って願いを叶えられなかったら本末転倒だ。

「……これ以上、父さんと母さんに迷惑かけない為にも……俺の人生を変えるためにも……勝ちたいんだ」

自身のＩＤコアを手にし、決意を呟いた。

◇

「ふむ……仮初の自信で突き進むか」

白いソファーに座る女性がアルデンの活躍や菜月昴の映像を見ていた。
「それはそれでワタシとしては面白いけれど……果たして何処まで行けるかな？」
女はティーカップに淹れていた紅茶を飲む。
「君の可能性をワタシに見せてくれ、菜月昴」
女は妖しく微笑んだ。